
仮面ライダー蒼～SOU～

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー蒼くSOUく

【Nコード】

N8030A

【作者名】

御剣剣次

【あらすじ】

50年前、日本を襲った謎の生物『ブレイン』。日本政府はそれに対抗して『特殊危機対応課』を設立して、ブレインを全滅させた。しかし、それでは終わらなかった。全滅したはずのブレインが、再び日本を襲撃してきた。そして始まる、人類とブレインの、終わりのなき戦い。ブレインに唯一対抗できる仮面ライダー蒼くSOUくの活躍の一部始終を御覧あれ。

第一話、プロローグ（修正版）（前書き）

謎の名探偵さんのコメントを見て、仮面ライダーもいけるかな？と思ひ、書いてみました。プロローグは、いろいろと詰め込んだので長いです。真面目な作品です。面白いほうがいいという方には『最悪戦隊！』をお薦めします。あれ、続き出ます。よろしくお願いします。（ガンパレやスカイはまだまだ更新できそうにない）

第一話、プロローグ（修正版）

「な、なんだ！ この化け物は！」

男が叫ぶ。その男の前には、人ではない何かが立っていた。

数分前。荒波にもまれる一隻の小型船。

その船内に、二人の釣り人が乗っていた。

「チッ、ついてねえな。スコールだ」

背の高い男が、船のエンジンを止める。

「ホント、ついてねえな」

もう一人の、体格のいい男が船内に入ってきた。

「どうする？」

体格のいい男が、窓の外を見ながら言った。

「どうするもこうするも、無駄に動くと沈むかもしれないから止めておくしか……」

その時、ガゴツという音が船のなかに響く。

「な、なんだ今の音？」

背の高い男が船内を見回す。

「船のそこに魚でも当たったんじゃないか？」

話し方こそ普通だったが、体格のいい男はかなり神経を尖らせている。なぜかは分からないが、とてつもない不安に襲われる二人。絶え間なく辺りを見回す。釣り道具がちらほらとあるだけだ。その時だった。

バタン！

ドアが勢い良く開いた。

二人はビクツとして振り返る。そこには、人ではない何かが立っていた。

「な、なんだ！ この化け物は！」

体格のいい男がそう叫ぶ。その人ではないものは、徐々に男たちに近づいていく。

「く、来るな！」

男たちは、手に触れるものを次々と化け物に投げ付けた。だが化け物は、怯むことなく向かってくる。

とうとう、体格のいい男のすぐ目の前に立つ。

「な、なんなんだ……」

化け物は、男の頭に手を添える。次の瞬間。

バキヤ！

いやな音のあと、体格のいい男の首は真後ろを向いていた。その場に崩れ落ちる死体。

「う、あ……」

背の高い男は、恐怖のあまり声が出なかった。

小型船は、波にもまれて横転した。

「……そういうことですね。それでは次のニュースです」

都内の小さなアパート、テレビを見ながら朝食を食べる男。

彼の名は国本 くにもと 美智留 みちる。彼は一応警察官である。

「ふー、食った食った」

美智留はそのまま横になろうとしたとき、携帯になる。

「あーはいはい、今ですよ」

美智留は携帯をとると、相手を確認した。

「彰か」

とりあえず通話ボタンを押し、電話にでる。

「もしもし」

『おう、生きてたか。とりあえず顔出せ』

ブツ

「……一方的だな」

美智留は携帯を閉じた。そして朝食の後片付けをし、スーツに着替えて携帯をポケットに入れ、部屋を出た。

警察署、本庁。

「入るぞ」

美智留がドアをノックし、そう言った。

「ああ、入れ」

部屋の中から返事があった。ここは、さっきの電話の相手の先宮^{さきみや}彰^{あきひ}の部署が設置されている、地下三階にある部屋。

ノブをひねり中に入る。

「おーす……寒！」

クーラーが効きすぎて、気温は13度を切っていた。

「おい、寒いぞ。クーラー止めろ」

美智留が体をさすりながら言う。

「俺だってそうしたいんだがなあ」

彰が困った様子で右に目を向ける。

そこにいるのは、彰の直属の部下で、妻でもある英実^{えいみ}だ。
「あたし暑いのはいやなの」

英実は、アイスを食べながら言った。

「そういわずに……」

「嫌なの」

ちなみに彰は恐妻家だ。

「というわけだから、我慢してくれ」

彰は苦笑いしながら言った。

「わかったよ。で、用事は？」

美智留は手近にあった椅子に腰を下ろす。

「ああ、そのことだが、英実、資料を」

英実は面倒臭そうに立ち上がると、いつのまにか手にもっていた資料を美智留に渡す。彰が語りだす。

「つい昨日のことだ、海岸に一人の男が流れ着いた。その男は目を覚ますと、友達を化け物に殺されたと何回も呟いたそうだ」

「化け物？」

美智留はその話を聞いて、前に聞いた話を思い出していた。

「ああ。警察は最初、その男は幻覚でも見たんじゃないかって思っていたが、俺は直感した」

彰は美智留のほうを向いて笑った。

「その男が見たのは、まさしくブレインだ！ ってな」

「おい、ちよつと待て」

美智留は話を止めた。

「ブレインは確か50年前に滅んだはずじゃ……」

「まあ、確かに、形のうえではな」

彰は意味深ない方をした。

「でも、考えてみる。奴らが滅んだのなら、何でこの部署はある？ そりゃまあ、経費も大幅に削られて、こんな地下深くに移されはしたけどよ」

彰は美智留に紙屑を投げ渡した。美智留は開いてみる。

【奴らはまた現れる】

紙にはそう書いてあった。

「なんだこりゃ？」

「預言者が書いたものらしい」

彰はデスクの上にある観葉植物を見ながら言った。

「預言者って、ブレインが現れることを予言したっていう、あれか？」

美智留は紙屑を丸めなおして、彰に返す。

「別にいらんから返すなよ。まあ、その預言者だ。そしてその預言者の言葉を信じて、この部署は残されてるわけだ」

彰は紙屑をごみ箱に捨てた。

「そして、ついに再びこの部署が日の目を見る日が来たわけだ。来ては欲しくなかったがな」

彰はもの悲しそうに言った。

「でもまだ、ブレインが出たって訳じゃないんだろ？　もしかしたら、本当にその男が幻覚を見ただけかもしれないだろ？」

彰は深くため息をついた。

「そうならいいんだがな。近くの海域で横転した小型船が見つかった。中から首が後ろをむいた仏さんが出てきたらしい。とてもじゃないが、人間にできることじゃないそうだ」

重苦しい空気がのしかかる。

「資料に目を通せ」

彰が静かに言った。美智留は資料を開き、黙読した。

「このライダーってのはなんだ？」

美智留が資料をすべて読み終わった後、彰に聞いた。

「ブレインに対抗するための特殊スーツがある。それを着込んだやつのことをライダーと言っらしい」

彰は答えた。

「へえ」

美智留は軽く返事をする。

「そして今から、おまえにはそのライダーになるために必要なものを取りに行ってもらおう」

彰は美智留を見つめながら言った。

「何？ 今からか？」

美智留は面倒臭そうに言った。

「ああ、そうだ。あちらさんが今日の三時がいいと指示してきた」

彰は頼杖をつきながら言った。

「あちらさん？ 誰だ？」

「行けば分かる。場所は池袋公園だ。早く行け」

美智留は反論しようとしたが、黙って立ち上がり、部屋を出た。廊下に出て表札を見る。

【特殊危機対応課】

そう書いてある。

美智留はエレベーターに向かって歩きだした。

第一話、プロローグ（修正版）（後書き）

長くてごめんなさい・・・書きたいこと書いてたら長くなってしまいました。次回はなるだけ（なるべくの意）短くします。

第二話、ライダー（修正版）（前書き）

暑い、暑い、暑い、暑すぎて何もやる気が起きない。宿題もさっぱりやっっていないためたまってる。マジピンチ！というわけで、しばらく執筆は中止します。

第二話、ライダー（修正版）

美智留は池袋公園のベンチで缶コーヒーを飲みながら待っていた。中央の噴水では子供たちが元気に水を掛け合っている。

「もうすぐ三時か」

腕時計を確認しながら美智留が呟く。

美智留は目を閉じ、吹き出る水の音に集中した。

何か妙に感じた。いつもどりの噴水の音。しかし、何かが違う、何かが。

「おう、いたいた」

美智留は目を開ける。目の前には濃い紺色のスーツを着た男が、ニコニコと笑いながら立っていた。

「あんたが美智留かい？」

「ああ、そうだが」

美智留は立ち上がり答えた。

「おおっと、失礼。俺の名前は浜口 はまぐち 博美 ひろみ だ。よろしく」

博美は手を差し出した。美智留は握る。

「俺は国本 美智留だ」

二三回軽く振ったあと、手を離す。

「詳しい話は彰さんからきいてるだろ？」

博美は聞いてきた。

「ああ、大体は」

美智留は答えた。視線は噴水のほうだった。

「だったら話は早い。ほい、これ」

博美はアタッシユケースを美智留に押しつける。

「これは？」

美智留はアタッシユケースを両手に抱えながら聞いた。

「ん？ ライダーベルト」

博美は率直に答えた。

「使い方はわかるだろ？」

「ああ、わかるが」

美智留はいやな予感がしてならない。いまずぐ、あの遊んでいる子供たちに『逃げる！』と叫びだしたい。すぐにでも子供たちのもとへ駆け寄って、噴水から離したい、などと考えていた。

「気になるか、噴水」

「え？ ああ」

突然の博美の問い掛けに思わず返事をする。

「そうか」

博美はそう言つと、噴水のほうへ歩み寄っていつて、子供たちに何かを耳打ちした。

子供たちはしばらく渋ったあと、公園から去っていった。美智留はほっとした。

博美が手招きしている。美智留は博美のどこまで行つた。

「さあ、ベルト装着して、好きなようにやってみろ」

博美は唐突に言つた。

「はあ？」

美智留はとりあえずアタッシュケースを開けた。中にはUの字の形の金属性のものが入っていた。それは資料で見た『ライダーベルト』というやつだった。

美智留はそれを装着した。思つたより付け心地はよかった。

「頑張つてくれよ」

そう言い残すと、博美は離れた。

「頑張れって、いったい何をだよ」

だが美智留は理解していた。胸騒ぎが大きくなってくる。冷や汗が頬をつたつた。

来る！ そう思つた瞬間だった。

ザバア！ と噴水の中から人が、いや、人の形に近い化け物が出てきた。

その姿をたとえるなら、カニが人型になつたというか、人がカニ

の殻でできた鎧を体に張りつけたかのようなものだった。

「これがブレイン!？」

美智留は身構えた。ブレインはこちらに近づいてくる。

「さて、こいつの力、みてやるか」

美智留はベルトに手を掛ける。ブレインはさらに近づいてくる。

美智留は、中央のフレームを思いっきりベルトの端まで引っ張ってくる。瞬時に美智留の体は青い光に包まれた。その光を見たブレインがひるむ。

「変身!！」

光の中で美智留が叫ぶ。その声に反応するように、光が破裂するかのよう膨らみ、消えた。

中から現われたのは美智留ではなかった。全身を青い鎧に身を包んだ、『仮面ライダー』がそこに立っていた。

ライダーは、ひるんでいるブレインにむかって突進した。ブレインが気付いたときには、ライダーのパンチをもらって後ろによろめいていた。

ライダーはその後、間髪入れずにパンチのラッシュを繰り出した。そして最後に右ストレートをたたき込む。後ろに三丁四歩よろめくブレイン。

ライダーは態勢を低くし、構えを作った。そして、跳んだ。三メートルほどうえに飛ぶと、空中で一回転し、キックの態勢を作った。

ブレインがライダーの姿を見たときにはもう手遅れだった。真っすぐにむかってくるライダー。

キックは見事に決まった。後ろに吹き飛ぶブレイン、着地するライダー。

ブレインは倒れるのと同時に小爆発した。

「さすがだな」

軽く拍手しながら博美が近づいてくる。ライダーは光に包まれた。その光から出てきたのは美智留だった。

「これならあなたに譲っても大丈夫そうだ」

博美はベルトから美智留の顔に目を移しながら言った。

「譲る？　じゃこれは俺にくれるってのか」

美智留は多少驚いていった。

「おいおい、勘違いすんなよ。それは政府の物だ。譲るつつつても貸し出す程度でだ」

苦笑いしながら博美が言う。

「わかってるよ、冗談だ。んじゃこれ、有り難く借りてくぞ」

美智留はベルトをアタッシュケースに収めて、歩きだす。

「しかし、本当にいたのか……」

博美は美智留の背中を、真剣な目付きで見ていた。

第二話、ライダー（修正版）（後書き）

新ライダー登場！ 必殺の攻撃はキック！ さすがライダー！ で
もやっぱ武器もたせたい。ということで武器募集します。採用され
たら登場しますよ。

第三和、美智留の生活

「ただいまー」

美智留はノックもせずに入屋に入る。手にアタッシュケースを下げて。

「おう、どうだった？」

彰が毛布をかぶりながら聞いてくる。それでもまだ寒そうだ。無理もない。この寒さでは何の防寒処理もしないでいると、確実に風邪を引くだろう。

「あー、もらってきたぜ」

美智留はクーラーの電源を切る。英実の怨めしそうな視線をかわしながら椅子に座る。

「変身も体験済みだ。対ブレイン用に開発されたことはある」

美智留は資料を手に取り読み直す。英実は睨むのをやめた。

「ライダーキックか」

ライダーの体術の項目を見てつぶやく。

彰はライダーベルトをめずらしそうに手にとって眺める。

「へえー。これって俺でも変身できるのか？」

彰はベルトを腰に巻きながら聞いてきた。子供っぽく笑う。

「やってみれば？」

武器の項目を開きながら美智留は言った。

「んじゃやってみっか」

彰はベルトのフレームに手を掛け引っ張る。が、びくともしない。

「あ、あれ？」

カチャカチャと何度もいじるが、何の反応もない。

「壊れてるのか？」

彰はベルトをはずした。

「さてはお前、壊してきたな？」

「なんでだよ！」

美智留は資料を投げ付けた。ファイルだったためあたった彰は痛！と頭を押さえた。

「ああそつだ。もう帰っていいぞ。用件はこれだけだからな」

彰は赤くなつたところをなでながら言った。ちょうど角の部分があたったようだ。

「そうか、わかった。じゃな」

美智留はクーラーのスイッチを入れて部屋を出た。出るときに彰が何か言っていたが無視した。

美智留は結構根に持つタイプで、呼び出しに対しての復讐であった。

美智留は市街地に来ていた。商店街では野菜の安売りをしていた。

「お、レタスが安い。すみません、これ三つください」

美智留の安い給料では一カ月を生き抜くのは厳しいので、こうして安いときに買い溜めしておかないと持たないのだ。

「はいよ。411円だよ。あんた、よくくるねえ」

店主が笑いながらレタスを袋にいれる。

「はは、まあね。あ、あとそれとそれと……」

アパートへの帰り道。美智留は袋を両手に20キロ分かって歩いている。店主が常連さんだから、と言って10キロもおまけしてくれたのだった。

「お……も」

両手に花ならぬ両手に野菜である。

やっとのことで自分の部屋に帰ってきた。

「ふいー。疲れた」

どさつと袋を置いたあとテレビを付ける。冷蔵庫から発泡酒を取り出し開ける。

「次のニュースです。本日の午後四時ごろ、日本政府がブレインが復活したと記者会見を開き発表しました」

美智留は口に含んだ発泡酒を吹き出した。

「いいのかよ、一般に公表して。そんなことしたら混乱が……あー！！」

美智留がテレビ画面を指差し叫んだ。画面には彰がいつぱいに映っていた。ご丁寧に所属部署、フルネーム、年齢などなどすべて出ている。

「大丈夫です。ブレインは我々が必ず倒します。住民の皆様は一人での外出を避け、ブレインに遭遇した場合はすみやかにその場から逃避して近くの警官に報告してください」

「だから俺を早めに帰したのか。あのやろー、偉そうに語りやがって。俺だって映りたかった……」

テレビ画面で悠々と演説している彰を見ながらふてくされる美智留。そのまま発泡酒を一気に飲み干した。三缶も。やけ飲みである。美智留はそのまま眠った。

トゥルルルル！

携帯が鳴る。頭を抱えながら美智留は起き上がった。二日酔いである。

電話に出る。

「はいもしもし」

「おう！ 美智留！」

「留守です。おかけ直してください」

美智留はすぐに切った。再びかってくる。

「まさか昨日のテレビのこと、怒ってんのか？」

「正確に言えば殺意が芽生えてる」

美智留は静かに言った。あまり大声を出すと頭に響くからだ。

「ま、まあ落ち着け。でもあれのおかげで俺たちの部署が地下からはい上がったぞ。もち給料アップだ！」

彰は話題をうまくそらした。

「ああそつだな。とりあえず俺は顔出しゃいいんだな」

「お、わかってんじゃないか。本庁の三階にこいよ」

彰は電話を切った。美智留は立ち上がると、薬箱から頭痛薬を取り出し飲む。そのあと制服に着替えて部屋を出た。

第三和、美智留の生活（後書き）

んー疲れる。ネタがあまり浮かばない。どうしよう。

第四話、ウエボンシステム（前書き）

怒られた。投稿しようとしたらまだかって怒られた。そんなに怒んなくても投稿しますよ。ごめんなさい。他の作品も滞ってるんです。

第四話、ウエボンシステム

美智留は本庁の前に立っている。正確には、入り口で張り込んでいる新聞記者やインタビュアーなどに足止めを喰わされている。

美智留は人の海を泳ぐように掻き分けながら中へと入っていく。

「ご苦労さまです」

入り口にいた警備員が入ってこようとするジャーナリストたちを押さえながら言った。美智留は敬礼で返す。

「三階だったな」

美智留は階段へと向かった。エレベーターがないわけではないが、美智留は幼い頃にエレベーターに乗ったときに停電が起こり、五時間ほど閉じ込められたことがあった。

それ以来エレベーターには乗らなかった。

三階にあがってすぐに見覚えのある字が美智留の目に飛び込んできた。

【特殊危機対応課】

「……随分立派な看板だな」

縦二メートル、横五十センチの看板だった。隅には薔薇が刷られていた。

「デカいのはあいつの趣味で、薔薇は英実の趣味か。バカップル……いや、結婚してるからバカ夫婦か。生まれる子供は可愛そうだな。痛！」

後頭部に痛みが走る。振り返ると英実が竹刀を手に持って、睨み付けていた。いたのが彰だったら死んでたな俺、と美智留は考えた。

「ごめんなさい嘘です」

二撃目を打とうと上段に構えた英実にとっさに謝った。さすがに上段からはきつい。

英実は構えを解いたあと、部屋へと入っていった。

「しかし、あの竹刀はいつたいどこから……」

深く考えるのはやめよう。美智留は疑問を振り払った。深呼吸してノブに手を掛ける。

「失礼します！」

その言葉と同時にドアを開けた。

「おう、来たか！ みんなに紹介しておこう、彼が『蒼』の国本美智留だ」

紹介？ 蒼？ なんのことだ？

美智留は一瞬にして混乱した。状況が読めなかった。

「とりあえずここに来い」

美智留はとりあえず彰の隣に行った。

「ほら、自己紹介しろ！ 俺たちの部下に」

彰が小声で言って、肘で小突いてきた。そうされて初めて、室内で丸椅子に座っている三人の人物に気が付いた。

美智留は頭を整理し、大きく息を吸った。

「私が、こいつの同僚兼部下の国本 美智留です」

彰が大笑いし、椅子に座っているものたちは啞然とした。

「よくやった美智留！ やっと雰囲気がらしくなってきた」

パンツと美智留の背中を叩く彰。美智留は彰のしたかったことぐらい予想していた。

「おまえたち、こいつと俺には遠慮はいらんからな。あ、だけどお偉いさんの前では敬語使えよ」

彰が制服をだらしなくしながら言った。新しい部下の一人が手を挙げた。彰がおもしろくなさそうに見た。

「なにかな？ 自分の名前と言いたいことを」

「中越 なかこし 久美子 くみこ です。先宮特殊危機対応課支部長どの、そのような怠慢な態度はいかなものかと思えます。」

彰と美智留は同時に思った。

『ああ、なんてつまらない奴』

彰は明らかに嫌そうな顔をして口を開いた。

「まず一つ、俺をその長い階級付けて呼ぶな。名前だけで十分だ」

「ですが先宮特殊危機対……」

「呼ぶなっていったろうが」

久美子は彰に負けないほどの嫌な顔をした。

「それともう一つ、ここでは階級による差別なし」

もはや啞然を通り越して呆れ気味な三人。

美智留は一人、窓の外を眺めていた。

「……まずいな」

「は？」

美智留の突然のつぶやきに彰は首をかしげた。

「ちょっと、行ってくる」

美智留はそう言うと、彰の机の上にあったベルトを掴んで風のよ
うにドアから出ていった。

「お、おい……」

彰は開け放たれたドアに言った。

「行くぞおまえたち！」

彰は美智留のあとを追うように部屋から出ていく。そのあとを追う三人。

英実は一人アイスを食べている。

本庁の入り口で張り込んでいるジャーナリスト達。ブレインの情報を得ようと必死の張り込みである。

中には自分の名を雑誌の会社に売り込もうと企むものもいる。

「警察は何も教えてはくれない。これじゃあ何に対して注意すればいいか分かんねえじゃん！」

一人の雑誌のインタビュアーが頭を抱え込んでつぶやいた。

雑誌のインタビュアーはほとんど引き上げたなか、彼一人だけが張り込みを続けていた。

「はああ、帰ろかな？」

視線を本庁の前の広場の真ん中に立つモニュメントに移した。奇妙なものを見つけた。

「なんだあれ？ 牛の人形？」

そこに立っていたのは牛に似た形の頭部をもった人型のものだった。

それはこちらに向けていきなり走り出した。

「おいおいおいおい！　なんか、やべえんじゃねえ！？」

彼の言葉に気付いた何人かがこちらに突進してくるものを見つけた。

「ブモオオオ！！」

それは鳴きながら何人かのジャーナリストを吹き飛ばした。

「うわああ！！」

一斉に逃げはじめるジャーナリスト達。

牛型のブレインはそれを追い掛けるように走る。

突然銃声が出て、一発の弾丸がブレインに当たった。だがブレインは怯む事無く銃声が出たほうを向いた。

警官たちが何度か撃つがブレインは平然と向かっていく。

もうダメか！　警官たちがそう思った時、中から一人の男が走ってきた。美智留だ。

「変身！」

美智留はベルトのフレイムを端まで滑らせる。瞬間に光に包まれ、中から仮面ライダーが現われた。

美智留は助走付きの右ストレートをブレインに食らわせる。後ろによろめくブレイン。

美智留はさらにパンチを連続でたたき込む。だが、ブレインは一瞬の隙について、強力な蹴を美智留に食らわせた。

「ぐ！」

防ぎきれず直撃した。美智留は後ろによるめく。ブレインがさらに蹴を浴びせる。後ろに五メートルほど吹き飛んだ。

「いつてえ……」

美智留は蹴られた腹部を押さえながら立ち上がった。スーツ越しに伝わってきた衝撃が腹部を直撃したのだった。立ち上がった美智留の目に、頭を突き出し突進してくるブレインが映った。避けようと思ったが間に合わなかった。

「うわぁ！」

なんとか両腕で防いだがかなりの衝撃が美智留を襲った。そのまま吹き飛んで本庁の入り口のガラスを突き破り中に滑り込む。

「チツクシヨ……」

美智留はふらふらと起き上がる。ブレインが近づいてくる。美智留は構えた。その時だった。

「美智留！ こいつを使え！」

彰が美智留に投げる。

「使えって……こいつをか！」

美智留は投げ渡された「鉄パイプ」を彰に見せ付けながら言った。

「そうだ。それ以外に何がある？」

彰が真顔で答えた。

「どうせなら拳銃とかよこせよ！」

美智留はブレインから目を離して彰に怒鳴った。

「バカか！ 誰がそのまま使えって言った！ ウェポンシステムを使え！」

美智留は何度か頷いた後ブレインのほうに向き直った。ブレインは突進の態勢に入っていた。

「リフォーメーション、ソード」

美智留はそう言っただけでベルトの右端にあるフレームを180度回転させた。すると手に握っていた鉄パイプが青い光に包まれ、光が破裂するように膨らみ、消えた。

中から西洋風の両刃の剣が現われた。

「よし、来い！」

美智留は剣を構えた。ブレインが突進してくる。

「せやああ！」

突進してくるブレインに振りかぶる。

「ライダースライス！」

美智留とブレインが衝突する……ことなくブレインが美智留をすりぬけた。

ブレインは真っ二つになり、ふらふらと二三歩よろめくと爆散した。

美智留は変身を解いた。

「ライダースライス？　なんだそりゃ？」

彰が美智留に聞いた。

「キックに名前がついてんだから斬撃にも付けたんだよ。そのほうがカッコいいだろ」

美智留は口から流れた血を拭きながら言った。

「なんつーか、カッコ悪い！　スライスってチーズか？」

このあとの口論は三時間にまで及び、長官に激怒されたのは言うまでもない。

第四話、ウエボンシステム（後書き）

右端のフレームはウエボンシステム、じゃあ左は何にしよう？
作者の想像力に期待！ 作

第五話、潜る敵（前書き）

色々悩んだ結果、今回は左端のフレームの能力は出しませんでした。

第五話、潜る敵

本庁三階。特殊危機対応課。

「あー、だりー」

口癖のようにその言葉を繰り返す彰。英実はその隣で黙々とデスクワークをこなしている。

「とりあえず仕事して」

英実は書類から目を離さずに言った。

彰は仕方なくペンを手に取った。子供ができたなんて名前にしようかな、と考えながら。

美智留は公園に来ていた。あの蟹型ブレインと戦った公園である。
「美智留さん、誰を待ってるんですか？」

久美子が缶コーヒーを渡しながら聞く。美智留は缶をあけながら答えた。

「んー、博美ってやつだ。男だからな」

久美子が『この不謹慎者！』という顔をしたので、最後の部分はあわてて付け足した。

「今日ここで会う予定なんだが……」

美智留は辺りを見回した。噴水では、この間の子供たちが遊んでいる。

「はあ、なんでこんな名前なのかな……」

美智留は空を見て言った。久美子がいきなり何を、といった感じの視線を美智留に向けた。

「ん、どうした？」

「いきなり何を言いだすんですか」

久美子は率直に言った。そういう性格なのだ。

「いや、あいつも美が付くだろ？　それで、さ」

美智留は思い出に浸るかのように目を瞑った。

「小学生の頃なんか、女みたいな名前だって馬鹿にされてたな。片っ端からボコボコにしてっただけだな。気が付いたらその学校の番長になってたし」

笑いながらさらつと言った美智留。久美子は聞いていない。

「高校行つた時なんか、その高校で番張ってるやつに因縁付けられて、逆に返り討ちにしてやってさ、そしたら俺が裏番張ることになつて……」

美智留は次々と自分の武勇伝を語る。久美子は聞いていないように見えて、実は聞いていた。

「そしたらよ……ん、来たか」

久美子が視線を上にあげると、髪をオールバックにして、濃い藍のスーツを着ている博美がいた。

「よう」

博美は笑って軽く手を挙げた。

「おう。それで、渡したいものって何だ」

美智留が立ち上がって缶をごみ箱に投げる。見事に外れた。

「ああ、こいつだ」

博美はアタッシュケースを美智留に渡した。

「まさか、ライダーベルトか？」

美智留はアタッシュケースをまじまじと見つめながら言った。

「違う、ベルトを二つ渡したって何にもならんだろーが。そいつは昇進祝いだ」

美智留はサンキュと言うとアタッシュケースを開けた。中には鍵が入っていた。

「鍵？　車か？」

美智留はその鍵をポケットにしまった。意外とせっかちである。「バイクだ。しかも特別製のやつ」

博美はそう言うと、ベンチに座った。美智留は公園の出入り口を

見た。

「おまえ……あいつを連れてきたのか？」

美智留はベルトに手を掛けながら尋ねた。

「連れてきた？ 俺は一人で来たぞ」

そう言つて博美は、公園の出入り口に目を移した。久美子もだ。

「来るぞ！ 久美子、博美、子供たちを頼むぞ！」

美智留は走りだした。走りながらベルトのフレームを端に引っ張る。

「変身！」

瞬く間に美智留は光に包まれ、仮面ライダーとなった。

美智留の向かう出入り口に、地面から現われたブレインが立っていた。

「うわ、モグラだ」

美智留は走りながら呟いた。そして思いつきり腕を振る。

だが、その拳は空を切った。

「何！？」

美智留辺りを見回した。確かにそこにいたはずのブレインがいなくなつたのだ。

「き、消えた！？」

美智留は後ろを向き、前に向き直つた。

美智留はとつさに後ろに飛んだ。足元からブレインの腕が伸びてきた。

「あつぶねーな」

美智留は地面を見ながら呟いた。そして左右に飛び回る。ブレインが地中から連続的に攻撃を仕掛けてくる。

「うわっ！ さすがに、きついな」

美智留は飛び出してきた腕に蹴を食らわせるが、ブレインの軽い悲鳴が聞こえるだけだった。

「クソッ、キリがねえ！ なんか使えるものねえかな」

美智留は辺りを見回した。そして、ベンチが視界に入った。

「よし、あれだ！」

ブレインの攻撃を前転で避けて、ベンチのほうへと駆け出す。辿り着くやいなやベンチを軽く一殴りし、破壊した。そして、ベンチのパーツだった金属性の棒を拾い上げ、すぐにベルトの右端のフレームに手を掛けた。

「リフォーメーション、スピア！」

フレームを180度回転させる。棒が光に包まれて、槍状に変化した。

「よし、これなら」

美智留は槍を構えた。マスクの下で目を閉じる。ブレインが地中から近づいてくる。

「もつすこし」

槍を軽く上に上げる。少しの間、静かになる。

「そこだあ！」

美智留は、ここぞとばかりに地面に槍を突き刺す。ブレインは悲鳴をあげ、地中から出てきた。

「うらあ！」

飛び出したブレインに追いの一撃。美智留は槍を投げた。その槍は見事にブレインの体を貫いた。ブレインはそのまま地面に落下し、立ち上がる。

「いくぜ、てやあ！」

起き上がったブレインにライダーキックが見事に炸裂する。ブレインは爆発し、四散した。

「よし！」

変身を解いた瞬間にガッツポーズをした。博美が拍手しながら木の陰からでてくる。

「さすがだな。これで東京は安泰だな」

博美は一人呟いた。

「ん、なんか言ったか？」

美智留が聞いた。

「いや、なんでもない。それより、俺はそろそろ帰るかな。まだ研究があるし」

博美は軽く手を振って歩きだした。美智留はしばらく見送ると、後ろに立っている久美子に振り返った。

「じゃ、俺たちもそろそろ戻るか」

美智留はめんどくさそうに言うど、さっさと歩きだした。久美子が小走りにあとを追う。

第五話、潜る敵（後書き）

いつか出します。必ず！

第六和、衝撃的（前書き）

内容見なおしたのだけでも、ぴったりくるタイトルが思い浮かばなかったのでもうなりました

第六和、衝撃的

「戻ったぞ」

美智留はドアを開けて中に入った。冷房がこれでもかと言わんばかりに効いた部屋に。

「おう。じゃ、早速で悪いが、書類整理を手伝ってくれ」

そう言う彰の机の上には、高さ二十センチほどの書類の束があった。

なぜ溜まったかは謎である。

「あー、悪い、用事を思い出した」

「待ってください、用事なんてないはずですよ」

あわてて部屋を出ようとした美智留を、久美子が襟元をつかんで阻止した。

結局、課のみんなで書類を片付けることになった。

「弘光、インクがでないから新しいのをくれ」

「はい！」

彰に新しいペンを渡したのが明智^{あけち} 弘光^{ひろみつ}である。ちなみに、その隣で黙々と仕事をしているのが綾瀬^{あやせ} 信^{まこと}である。

二人とも、久美子と一緒に課に来たのだった。

「まったく、なんだってこんなに……」

呆れたためか、美智留の言葉はそれ以上続かなかった。

十二時までには書類はすべて片付き、各自適当に昼食を食べるようになった。

「んじゃ俺はいつもの店に行くかな」

美智留は早々と部屋を出た。

「さて、今日の弁当の中身は何かかな？」

彰が弁当箱のふたをあける。

「……」

そしてゆっくりと閉じた。

「食べなかったら、明日からもうお弁当作んない」

英実が自分の弁当を食べながら言った。彰は苦笑いしながら再びふたをあける。

「おつす、おやつさん」

美智留はガラガラと引き戸を開けて、店のなかに入る。

「おう来たか。いつもので、いいか？」

店の店主が景気よく言う。

「ああ、たのむ。しかし、ここはいつきても不況知らずだな」

満席とまではいかないが、結構な人がいる。美智留は苦笑いしながらカウンター席に座る。

「いつか座る場所無くなるんじゃないかねえか」

「なあに、そんな心配はいらんよ。おまえさんの指定席はいつでも空いてるからよ」

店主は笑いながら言った。もちろん冗談である。

「まあ、満席なのはうれしいな。店が潰れないってことだからな」
美智留も笑う。

「そりゃそうだ。っと、出来上がり、お待ち！」

トンと美智留の前に山芋ネギ生姜ラーメンが置かれる。

「ほいきた！ いただきまーす！」

美智留は割り箸を割った。その時に店の引き戸が開いた。

「いらっしやい！」

店主が景気よく言った。美智留は何となく入ってきた客を見た。

「……久美子？」

美智留の一言にびくつと反応する女性。

「美智留さん？」

『なんでここに？』

二人の声がダブる。美智留が先に答える。

「いや、俺はいつも仕事のあと、ここに飯食いにきてんだ。おまえは？」

久美子は、私も同じですと、納得いかない様子で答えた。

「おや、おまえたち知り合いだったんか」

店主が手を休める事無く言った。

「まあ、そんなとこかな」

美智留はラーメンを食べ始める。久美子は座れる席を探した。

結局、美智留の隣の空いた席に座った。

「いつものかい？」

久美子はうなずいた。

「はいよ！」

店主は別の客にチャーハンを出して、『いつもの』を作り始めた。

「ふー、食った食った」

かなり早い完食である。所要時間は9分。久美子の『いつもの』が出来上がる前に終わってしまった。

「今日もうまかったぜおやっさん。はい勘定」

730円をカウンターに置く。

「まいど」

店主が料理を作りながら言った。久美子は啞然として見ている。

美智留は店を出て、考えた。

「待てよ、博美がなんか言ってたような気が……」

美智留は頭をひねる。

「……あ、そうだ。確かプレゼントのバイクが本庁にあるんだ」

大事な用件を思い出した美智留は、本庁に向かった。自転車で。

「バイクかあ。免許とつといてよかった」

自転車を軽やかに走らせながら呟いた。

「楽しみだな。どんなのかなー……！」

美智留は急に自転車を止めた。そして、道の脇の空き地に入る。

「出てこいよ。いるのはわかってんだよ」

美智留は身構えた。腰に手を当てた。

「……」

腰の辺りを探る。

（そういえば、仕事終わったあとすぐに飯食いにいったから持ってきてねえや）

焦りが混じった苦笑いを浮かべて、自転車の方へ後退りする。

こんなときに忘れ物はきついな、などと心でつぶやき、目の前に立つブレインを見た。

「あー、まずい……」

美智留は覚悟した。ブレインが歩み寄ってくる。

「こうなりやヤケだ！」

上着を脱ぎ捨て構える。

「命は粗末にするものじゃないですよ」

後ろから突然声がした。美智留が振り返ると、高校生と思わしき人物が立っていた。

そしてその隣には……

「博美！？」

博美は軽く片手をあげてあいさつし、ポケットに手をつ突っ込んだ。

「まあとりあえずこっちにこい」

博美は微笑を浮かべて言った。美智留はとりあえず従った。

「大丈夫です。あとは俺に任せてください」

美智留にそう言って、ブレインに立ち向かっていく少年。美智留はすれ違いざまに少年の腰をみた。

「ベルト！？」

美智留は驚いた。無理はない。

「変身！」

少年はそう叫んで、腰のベルトのフレームを端まで引っ張った。すると、少年は赤い光に包まれた。

そして、光が消えて、中から赤い色のライダーが姿を現した。

～続く～

第六和、衝撃的（後書き）

ついに二人目のライダー登場！
か気になる……

彰の弁当がどんなのだった

第七話、紅く KURENAIく (前書き)

紅の強さはハンパ無い!?

第七話、紅く KUREN AI

「う、ライダー！？」

美智留は驚いた様子で紅いライダーの背中を見つめた。

「ああ、新しいベルトの開発に成功したからな。試作品だが、前作のベルトより性能がいい」

博美は腰に手を当てて言う。

「前作のつて、俺のか！」

「まあ、見とけ」

博美にそう言われ、仕方なく紅いライダーの戦いを見る。

「やあ！」

紅いライダーは山羊型ブレインに殴りかかる。しかし、あまりダメージを与えている様子はない。

「おいおい大丈夫かよ」

美智留はつぶやく。

「全然効いてねえじゃねえか」

「まあ、黙って見とけ」

博美はポケットに手をつ込んだまま見ている。

「たあ！」

紅いライダーはブレインにラッシュを浴びせるが、怯むだけでほとんどダメージは無かった。

「メエアア！」

山羊型ブレインは隙をついて紅いライダーに強力なパンチを食らわせた。

「ぐ！」

紅いライダーは後ろにのけぞった。さらにブレインは追い打ちをかけたが、軽やかに回避された。

「ふふ、シュミレーションより敵が強い」

紅いライダーはそう言つて、ベルトの左側のフレームに手を掛けた。

「アクションバック・メモリー！」

そう叫んでフレームを180度回転させる。ベルトが紅い輝きを放つ。

「うあああ！」

紅いライダーはカーブブレインを殴った。さすがに効いたようで、ブレインは後ろによろけた。

「リプレイ！」

それを確認した紅いライダーはすかさず、フレームを180度回転させた。

すると、紅いライダーが二つに分離した。いや、正確には半透明の残像があらわれた。

「いつけえええ！」

残像がブレインに強力なパンチを浴びせた。ブレインはさらに後ろにのけぞる。

だが、それでは終わらなかった。殴った残像が消えたあと、さらに新しい残像があらわれた。

「な、なんだありや！？」

美智留が驚いている間に残像がブレインを殴り、消え、再び現われる。

「新機能さ。高速対消滅粒子の時空間記憶能力を生かした、な」

博美の言葉に、理解できないという顔で博美を見つめる美智留。

博美は美智留に振り返った。

「俺にもわからん」

そのやりとりの間にブレインは12発ほど強力なパンチを浴びて、ふらふらになっていた。

「そろそろいいかな？」

そう言つて紅いライダーは態勢を低く取った。

「やあああ！」

そのままの態勢でブレインに向かっていく。
ブレインに向かって走りながら右側のフレームに手を掛け、36
0度回転させる。

「コンヴァーシヨン・ハンド！」

紅いライダーの右腕が紅い光に包まれた。そして、光のなかから
鋭く尖った腕が出てきた。

「てやあ！」

そのまま体のバネを利用してブレインに突き刺す。
ブレインは貫かれた瞬間に爆発した。

「す、すげえ……」

美智留は驚いていた。自分とは違う、新たな機能をもったライダ
ーに。

「終わりました、博美さん」

紅いライダーは変身を解き、博美に言った。

「なかなかだったぞ」

博美は高校生の肩をぽんと軽く叩く。

「ありがとうございます。ところで、このかたは？」

少年は美智留のほうを見ていった。

「ん、ああ。こいつはおまえの先輩だな。ライダーだ。互いに自己
紹介しとけ」

博美が美智留の背を叩きながら言った。

「ええ、そうですね。初めまして、僕は朽木 修くちぎ しゅう、よろしくお願
いします。ええと……」

修は美智留の自己紹介をまつ。

「俺は国本 美智留だ。よろしくな」

二人は握手する。

「俺のにはないのか？」

美智留は自転車にまたがって博美に聞く。

「ああ、なにがだ？」

博美は車に乗る直前で止まった。

「左フレームの機能」

「ない」

美智留の質問に対して速答だった。美智留は口を開けて『は？

何ふざけたこといってんだ？』ということを、顔で全力を尽くして表現した。

「わかった。わかったからそんな顔してこっちをみんな。明日三時、最初に会った公園にベルト持って来い。バージョンアップしてやる」
博美はそう言うのと車に乗り込み、発進させた。

「……明日三時か……。バイクとりにいこ」

美智留は自転車をこぎ始めた。

余談。美智留がブレインに会ったぐらいの時間。

「あー……まずかつ……。おいしかった、ご馳走様」

彰は箸を置く。英実が彰の首筋に当てていた箸をしまった。

「なあ、頼むから俺の嫌いな物ばかり弁当に入れるのやめてくれ……」

……」

「だめ。好き嫌いはだめ」

涙目の彰の提案をさらっと拒否して、ベルトを手にもった。

「そんなこと言わずに……。あれ、そのベルトは……」

彰は頭に手を当てて大きくため息をついた。

「あいつ、忘れてったな……。馬鹿野郎……」

どうしようもねえなあと思いつつ椅子に深く座る。

第七話、紅く KURENAI (後書き)

次回はたぶんライダーの専用バイク関係の話になると思います

第八話、美智留の秘密（前書き）

さあ、今回はバイクメインではありませんが、第二話あたりから謎だった「なぜ美智留はブレインが出るのを予知できるのか」について、少しだけ事実が明かされます

第八話、美智留の秘密

「ふー、疲れた」

美智留は本庁の自転車置場に自転車を置いて、建物のなかに入る。
三階に昇り、特殊危機対応課に足を運ぶ。

「ベルト忘れた」

あいさつ代わりにそういつて部屋に入る。

「バカやろ」

彰はベルトを美智留に投げ渡した。

「んじゃ、行ってくる」

美智留はベルトを肩に下げて部屋を出る。

「えー、と、バイクバイク……」

美智留は本庁の地下一階にある駐車でバイクを探す。

「バイクバイク……」

見当たらない。

「バイクバイク……」

駐車の角から角まで念入りに探すが……。

「どこにもねえじゃねえか！」

思わず肩に下げていたものを床に叩きつける。ガイン！ という

音が駐車場に鳴り響く。

「うわ！ しまった！」

急いで拾い上げ、故障してないか点検する。

「…… たぶん壊れてない……」

全体を見回して、振ってみるが異常はなさそうだった。

「…… バイクは外か？」

美智留はベルトを床に叩きつけたことを、バイクをダシにして忘

れようと努力するのだった。

とりあえず駐車場から出る。自転車の駐輪場に行ってみた。

「……あつた……」

意外にもあつさり見つかった。しかも……。

「俺の自転車の真横じゃねえか！　なんで気付かなかったんだ……」
自分に絶望する美智留。

「とりあえず、公園行かなきゃな」

再び別のものをダシにして忘れようとする美智留。

バイクに鍵をさして、エンジンを起動する。

「お、いい感じ！」

美智留はヘルメットを被り、バイクを駐輪場から出して発進した。

公園。

「やあ！」

紅が犬型ブレインと戦闘していた。

「う、動きが速い！」

紅は殴り掛かるが、犬型ブレインは軽やかにかわす。

「クツ、えい、てや！」

連続でパンチを繰り出すが、手で受けられたりかわされたりし、なかなかダメージを与えられない。

犬型ブレインは、紅が出したキックを受けとめて、投げ飛ばした。
「うわっ！」

思いつきり投げられたため、地面を転がる紅。とっさに立ち上がるが、ブレインの蹴りを浴びて再び地面を転がった。

「くそ！」

紅は素早く立ち上がり、ブレインの攻撃を防いだ。

「（このままじゃまずい！）」

紅はブレインの隙について殴り飛ばし、間合いをとった。そして、

右側のフレームに手を掛けた。その時、紅は強い衝撃を受けて、吹き飛ばされた。

「うわぁ！ な、なんだ!？」

後ろを振り返ると、猪型のブレインがいた。

「ブレインが二匹!？」

紅はふらふらと立ち上がると、猪型のブレインのほうを向いた。しかし、後ろの犬型ブレインから攻撃を受けた。

「うつ！ ひ、卑怯だなぁ……」

紅は態勢を立て直すと、右側のフレームを素早く回転させた。

「コンヴァーシヨン・ボデー!」

紅の体が紅く輝いた。光が消えると、まるで甲冑を着込んだかのような姿の紅がいた。

「そろそろ美智留さんがくるから、なんとか耐えなきゃ……」

紅は守りの態勢に入った。ブレイン達が殴り掛かるうとした瞬間、すさまじい排気音が公園内に響いた。

「うおりやぁぁ!」

美智留は勢い良く前輪をあげて、猪型ブレインに体当たりを食らわせた。

「大丈夫か!？」

美智留はバイクから飛び降りて、フレームを端まで引っ張る。

「はい、大丈夫です」

紅はフレームを回転させて、元の姿に戻った。

「そうか。変身!」

美智留が蒼い光に包まれて、蒼へと変身を遂げる。

「さあて、とっておきを見せてやるか」

蒼は、バイクに手をかざして、右側のフレームを回転させた。

「デIFOォーメーション・ザンバ!」

蒼がそう叫ぶと、バイクが蒼い光に包まれた。

「いよっしゃ!」

蒼い光が消えると、バイクは全長二メートルほどの大剣に変わっ

ていた。

「エクセキューション・スラッシュ！」

無駄ともいえる決め言葉を発して大剣を横に薙ぎ払う。猪型ブレインが真つ二つになり、爆発四散した。

「コンヴァーシヨン・ハンド！」

紅は右側のフレームを回転させて、腕を鋭い槍型にして、犬型ブレインを貫いた。爆発。

「ふう……」

紅は変身を解き、美智留に握手を求めた。

「ありがとうございます。まあ、来てくれるとは思ってましたが」

「は？ それは、俺が来るってわかってたってことか？」

修は手を差し出しているが、美智留は無視して聞いた。

「ええ、当然ですよ」

少し不機嫌に手を引つ込めながら修が答えた。

「ちよつとまで！ いや、握手のほうじゃなくて、なんで俺が来るってわかってたって話のほうだ」

美智留の問い掛けに、差し出した手を再び引つ込めながら修は口を開く。

「なぜって、同じパーシブだからですよ、僕達は」

いきなり聞いたことのない言葉が飛び出し、少し混乱する美智留。頭を抱える。

「あー、ちよつとまで、パーシブってなんだ？」

修は、美智留の反応に驚いた。

「え！？ 知らないんですか！？」

美智留は首を縦に振る。

「さては博美さん、美智留さんに説明するの忘れてたんだ」

修はめんどくさそうに美智留のほうを向く。

「じゃあ、博美さんが変わって説明します。パーシブとは、簡単に言えば『ブレインを探知する能力』をもった人のことを差します」

美智留は、頭のなかで整理をつけ、顔を上げた。

「つまり、俺がブレインの居場所とか出る出ないがわかったのはその能力のおかげってわけか？」

「その通りです。飲み込みが博美さんより早いですね」

修が笑顔で言った。

「まあ、どうして探知できるかは知りませんが。じゃあ、僕は帰りますね。お勤め頑張ってください」

修はそう言っていると、公園の出口に向かって歩きだした。

「おう、おまえも頑張れよ」

美智留がそう言っていると、修は振り返って、頭を下げて返事をし、再び歩きだした。

「お勤め、か」

今日はもう夕日が沈んだから帰ろうとつぶやき、帰宅した。無論、勤務時間は無視である。

第八話、美智留の秘密（後書き）

ディフォーメーション・ザンバ！ 個人的に好き ちなみに、わか
ると思いますが、ザンバとは斬馬刀のことです

第九話、最大の危機（前書き）

タイトルの意味は……本文で！

第九話、最大の危機

朝。太陽の光が窓から注ぐ。

「んー……」

布団に包まって起きようとしないう美智留。

その時、携帯が鳴る。美智留は布団の中から手探りで携帯を探す。携帯が手に触れた。

「はいはい、ちょっと待って」

アンテナを伸ばさずに通話ボタンを押す。

『やっと出たか』

携帯から彰の声が微かに聞こえてくる。

「遅くて悪かったな。で、なんで小声なんだ？」

目を瞑りながら美智留は聞いた。

『そりゃ、大きな声出したらばれるからだろ』

彰は楽しそうに言った。美智留は何となく嫌な予感がした。

『まあそれはいいとして、手離すけど、いいか？』

彰の意味不明な言葉に思わず……。

「別にいい……」

『そうか。じゃ遠慮なく』 彰がそう言った瞬間、美智留の右脇腹に衝撃が来た。鈍い痛みが美智留を襲う。あえて言うなら【今の人生が脳裏をかすめる】ぐらいの痛みである。

「ガ……ガゲ……」

しばらく布団の中で、声にならない呻き声を上げながら悶絶する美智留。

「目、覚めたか」

笑いを必死に噛み殺しながら聞く彰。

「……おま……どやって……中に……ング……」

美智留は悶絶しながら彰に聞いた。

「そりゃ、玄関から決まってるんだろ。大家さんに合鍵借りて入っ

「ただ」

俺に味方はいないのか……、そんな考えが浮かぶ。

「まあとりあえず、起きろ」

美智留はやむなく起き上がる。ふと、疑問が浮かぶ。

「（こいつ、何落としたんだ？）」

布団の脇を見る。

「（あー、熊が鮭くわえてる）」

美智留は怒りのあまり頭が回らなかった。とっさに名前が出なかった。

「彰ー！ 殺す気かー！ ってか死にかけたぞ！」

彰に掴み掛かる美智留。

「わっ！ 馬鹿やめろ！ お、落ち……あ」

「いたたた……」

美智留は自転車をこぎながら腰を押さえる。

「まったく、一日で二度死にかけるとは思わなかった……」
そうしているうちに公園前についた。

「珍しく遅かったな美智留」

先に着いていたらしい博美が言った。

「ああ、寝坊した」

本当は、彰と二時間近く口論戦をしていた。

「寝坊って……まあいいが。それより、ベルトを」
博美が手を差し出す。

「あ、いや、それより先に済ませたいことがあんだけど……」

美智留が苦笑いしながら言った。

「済ませたいこと？」

「とりあえず、こっち」

不思議に思っている博美を、手招きして歩く美智留。近くの茂み

に入る。

「……これは？」

博美が、茂みに隠してある【ザンバ】を見て聞いた。

「いやー、おもしろいこと考えて実践したら、どうやって戻すのかわかんなくて……」

美智留は苦笑いしながら明後日の方向を見ている。

ザンバは、辛うじて元がバイクだとわかるフォルムだった。柄が後輪、フレームと座席と前輪が背面、エンジン部分と前輪のホイールが刃となっていた。

「……」

博美は無言でザンバを見ている。美智留には、それが痛かった。

「まさか、戻す方法はない、とか言わないよな？」

美智留は博美の顔を覗き込む。博美はため息を一つついた。

「説明書読んでないのか？ フレームを逆回転させれば戻る」

博美は呆れたという口調で言った。

「え、そうなのか。じゃさっそく」

美智留はベルトを腰に着け、フレームを引っ張る。

「変身！」

蒼い光から蒼が現われて、すぐさまフレームを回転させた。

「……戻んねえよ？」

「馬鹿か。ボイスコマンド忘れんな」

ボケた（わざとではない）美智留に正確にツッコむ博美。

「ああそうだ。で、ボイスコマンドは？」

美智留が聞くと、博美はめんどくさそうにため息をついた。

「デフォルトだ」

美智留は軽くうなずいて、フレームに手を掛ける。

「デフォルト！」

フレームを通常の反対に回転させる。すると、ザンバが蒼い光に包まれて、光が消えたときに元のバイクに戻っていた。

「ふー、よかったよかった」

美智留は変身を解きながら言った。博美は呆れ返っている。

「これでいいだろ。ほらベルト」

美智留は博美にベルトを渡した。

「あまりこいつを見られたくないから、ここでやつちまうぞ」

そう言々と博美は、工具セットを手にかけていたアタツシケースから取り出した。

「どうするんだ？」

美智留が興味深そうに覗き込む。

「左フレームを換装するんだ」

そう言いながらフレームを器用に取り外す博美。外した左フレームを下に置き、アタツシケースの中のフレームを取り出した。

「そいつにはどんな機能があるんだ？」

美智留はフレームを付けにかかっている博美に聞いた。

「あとで説明書やるからよんどけ」

そう言いながら着々と作業をすすめる博美。

始めてから約二分、作業は終わった。

「早いな」

美智留は驚いて、博美から渡されたベルトをまじまじと見つめた。
「当たり前だ。もしかしたら、すぐにでもブレインがでるかもしれないんだから……どうした？」

自慢げに話す博美は、美智留の異変を見逃さなかった。

「噂をすればなんとやら。本当に来たぜ」

ベルトを装着して茂みを飛び出した。そして道路のほうに向き直る。

歩道で歩いている女性がいた。その後ろでは、気付かれないように忍び足で女性に近づく豹型ブレインがいた。

「とりゃあ！」

とりあえずブレインにドロップキックをお見舞いする美智留。女性には気が付いて、軽く悲鳴をあげて尻餅をついた。

「とりあえず逃げろ！」

美智留がベルトに手を掛けながら言った。

「美智留さん!？」

その時、背後から聞き覚えのある声が聞こえてくる。美智留は思わず振り返った。

「久美子!？」

美智留は驚いて、ブレインから気を逸らしてしまった。

「美智留さん、後ろ!」

久美子が指を指して叫んだ。だが、美智留が振り返ったときにはもう遅かった。

「グワウ!」

ブレインの牙が美智留を襲う。

「うわ!」

美智留は辛うじて身をよじり、致命傷は避けたが、二の腕の肉を引き裂かれた。

「美智留さん!」

久美子が助け起こす。美智留は腕からおびただしい血を流していた。

「骨まではいってねえみたいだが、動かねえ」

美智留は苦しそうに言う。ブレインが歩み寄ってくる。

「ドチクシヨウ! やられてたまるかあ!」

美智留は久美子に支えられながらベルトのフレームを引こうとする。

「久美子、手伝え!」

久美子とはつきに右フレームを掴んだ。美智留が攻撃を受けたのは右腕だからだ。

「変身!」

二人同時にフレームを引く。蒼い光に包まれた。

ブレインが光目がけてパンチを繰り出したが、光から伸びた足に蹴飛ばされ、後ろに吹き飛んだ。

「馬鹿にすんなよ!」

光が消えて、蒼が立ち上がる。しかし、右腕は重力に逆らわずに垂れ下がっていた。

「無茶です美智留さん！」

久美子の制止を振り払ってブレインに突進する蒼。

「うおらあ！」

ブレインに蹴りを浴びせる蒼。だが……。

「うぐっ！」

右腕に衝撃が伝わってくる。思わず怯んでしまう。その隙をブレインは見逃さなかった。

「グナアア！」

ブレインは蹴りを、蒼の右腕目がけて放った。

「がああああ！」

蒼は蹴りの衝撃、というよりは腕の痛みで地面を転がった。

「ツクシヨ、マジでやべえ……」

蒼はふらふらと立ち上がった。

「……どうすれば勝てる……考える……」

蒼は、気が狂うどころか、普段よりもさらに冷静になっていった。ブレインが走ってくる。

「……これだ、これしかない！」

ブレインが着実に距離を縮めてくる。止めを刺そうと爪を伸ばし、牙を肥大化させた。だが蒼は、地面に座り込んだ。

ブレインが飛び、爪と牙で蒼を引き裂こうとしたその時。

「デIFOォーメーション・ランス！」

左手で右端のフレイムを回転させた。

ブレインの爪が蒼を貫こうと、あと数センチまで迫った刹那、地面から、中世の騎士の持っていた重槍を思わせる形の刺が地面から飛び出し、ブレインを貫いた。

「ヌア、ガ！」

ブレインはしばらくもがいたあと、爆発した。

「はあ、はあ、い、一日で三度も死にかけるとは、思わなかった……」

…」

蒼は力尽きて、地面に倒れ伏した。その時に変身が自動で解けた。装着者が気を失うと自動で解ける仕組みなのだ。

「美智留！」

「美智留さん！」

久美子と博美が美智留に駆け寄った。

第九話、最大の危機（後書き）

なかなか頭がいいですね美智留。彼の安否が気になるところでですね。それにしても、一日に三回も死にかけるなんて……厄日ですね

第十話、果てしなき戦い（終）（前書き）

このたびは、『仮面ライダー蒼々SOU』をご閲覧頂き、誠にありがとうございます。このたび、この作品は今回をもって終了いたします。詳しくは後書きでご説明いたします。

第十話、果てしなき戦い（終）

「……がはぁ！」

突如起き上がる男。しかし、腕に負った傷に響き、再び倒れた。

「いたた……ここ、どこだ！」

男は部屋の中を見回す。白を基調とした室内。白が眩しい。

「ええと……俺は誰だっけ？」

とりあえずボケてみようと思い、冗談をかます。

「美智留だろうが」

ボンと右腕をたたかれ、危うく意識が飛びそうになる美智留。

「馬鹿野郎！ なにしゃがる！」

美智留はとりあえず怒鳴った。目は虚ろ。

「わ、わりいわりい……いつもみたいな調子でやつちまった」

苦笑いを浮かべる彰。この時はじめて、生きてるということを実感した美智留。

「そっか、俺、やられたのか……」

目を伏せる美智留。彰も目を背ける。

「まったく、大切な時期に重傷なんか負いやがって」

博美がカーテンを手で押し開けて入ってきた。

「わりい……」

美智留は素直に謝った。そのせいで博美も調子を崩された。

「まあ、修がいるからしばらくは大丈夫だろうけど、早めに治せよ」

博美はそれを言った後、情報誌を美智留に投げよこした。

「見舞いの品だ」

それを言っと、部屋から出ていく博美。

「俺も勤務があるからな、行くか。じゃ、せいぜい養生しろよ」

彰も立ち上がった部屋を出ていく。美智留はため息をつき、目を閉じる。

「数時間前」

「いったいどういうことをしたら、ここまで体を酷使できるんですかね」

「医者が検査結果の紙を見ながら言った。」

「あの、どういうことですか？」

「彰が不安な顔をして医者に尋ねた。」

「全身の筋肉は疲労しきっている。さらに関節も同様だ。常人なら、動いているのがやつとの状態だ」

「彰はそれを聞いて、驚きの表情をした。」

「そんなに……」

「医者はため息をついて、紙を机の上に置いた。」

「とにかく、このまま同じことを続ければ、体が壊れて、二度と動かなくなる」

「彰は顔を伏せた。」

「（どうする……）」

「彰は悩んだ。仕事上の上司としては戦いをやめさせるわけにはいかない。しかし、美智留の仲間としてはもう無理をさせたくない。」

「そして、決断した。」

「……美智留」

「彰は、友の名を小さくつぶやいた。」

「……そうですか、わかりました。それで、美智留には言ったんですか？」

「博美は待合室の椅子に座っている。」

「言えるわけないだろう……」

「彰は柱に背を預けている。」

「それでは、これはあなた個人の頼み、ということですね」

「博美は無表情で彰に言った。彰は静かにうなずいた。……」
互いに無言のまま、病院を出た。

一週間後。

「……な」

美智留は愕然と口をあけて驚いている。

「う、嘘だろ!？」

美智留は、すぐそこで椅子に座っている博美に問いただした。博美は首を横に振る。

「本当だ」

博美は、少し悲しみを帯びた顔を美智留に向ける。

「おまえは、もうライダーとして戦わなくていい」

博美はそう言い放った。美智留は博美の襟を乱暴に掴んだ。

「どうということだよ!」

ゆざぶろうとしたが腕が痛み、放してしまった。

「上の決定だ、諦めろ」

博美はなるべく感情を込めないように言った。美智留は顔をふせた。

「……すまん、一人にしてくれ」

美智留はうつむいたまま言った。博美は何か言おうとしたが、何も言わずに立ち上がり、部屋を出た。

一人残された美智留は考えた。

なんで俺はこんなにライダーに依存してるんだ？

そもそもライダーには適当になったはずなのに、たった一〜二週

間で当然のことに思えてたのはなぜ？

なんで俺はライダーに……

なんで？

「先生、大変です！」

美智留の部屋に入った看護婦が、近くを通りかかった医師に駆け寄った。看護婦は息を整えた。

「102号室の美智留さんがいません！」

看護婦は早口に言った。医師は驚き、すぐに電話をしに走った。

特殊危機対応課。

「あれ？ ベルトが無くなってる」

弘光が、ベルトを保管しているアタッシュケースの中をみて言った。

「何？ まさか物取りか？」

信がアタッシュケースを手にとって調べた。

「まさか、そんなわけないだろ。ここ警察署だぜ？」

信はそうだな、と納得した。

「まあ、彰さんが持ってたんだろ、きつと」

信はアタッシュケースを片付けた。

「やあ！」

紅は虎型ブレインと戦っていた。

「てや！」

殴りかかるが、あっさりとかわされる。逆にブレインからの攻撃を受け、後ろによるめいた。

「うぐ！」

すぐに体勢を立て直した。その時、ブレインが空に向かって吠えた。すると、まわりの茂みや木の上から虎型ブレインが次々と現われた。

「うわっ！ せこい！」

紅はまわりを囲むブレインを見渡した。ブレイン達は牙を剥き出して威嚇している。

「こんな数、無理……」

一体のブレインの合図で、一斉に紅に襲い掛かる。紅は頭を抱えて体を縮めた。ブレインの牙が紅を引き裂こうと飛び掛かった時……。

「伏せろ！」

聞き覚えのある声が聞こえた。紅は指示どおりに地面に伏せた。

「ファスン・ビギン！」

聞きたかった声が紅の耳に入る。次の瞬間、ブレイン達の体に蒼い光線が刺さった。いや、円形に広がった光はブレイン達の体を貫き、空中に固定した。

「よう、元気してたか？」

紅は背後から聞き覚えのある声をかけられる。思わず振り返る。

「美智留さん！？」

そこにはいるはずのない人物が、ライダーがいた。

「そろそろ時間切れだ。覚悟決めろ修」

蒼は指を鳴らした。紅も立ち上がり、右フレームに手を掛ける。

「コンヴァーシオン・ハンド！ ヴァージョン・サーベル！」

紅はフレームを一回転させた。両腕がカトラスのようになった。

「アウト」

蒼のベルトから無機質の男性の声が聞こえた。次の瞬間にはブレイン達が拘束から逃れ、一斉にライダー達を睨み付けた。

「もう決めたぜ！」

蒼はブレイン達に向かって力強く指を差した。

「てめえらはこの俺が、命を賭けてぶっ潰す！ なぜなら……」
ブレイン達がライダー達目がけ向かってくる。

「俺は、『仮面ライダー』だからだあ！」

蒼と紅もブレイン達目がけ突っ込んでいく。

「うらあ！ やってやるー！」

蒼はおたけびをあげながらブレインに殴り掛かっていった。

〳十年後〵

「はい、コーヒー」

赤髪の男は、物腰柔らかそうな青年に缶コーヒーを投げ渡した。
「ありがとうございます」

青年は缶を開け、飲み始める。

「そろそろ到着です」

青いスーツを着た久美子が後ろの二人に言った。

「そうですか。圭太、ベルト装着」

赤髪の男が、圭太^{けいた}という青年に指示した。青年はベルトを腰に装着する。

「修さん、ブレインの前に誰かいます！」

青年が車の窓の外を指差しながら言った。

「美智留さんだ。相変わらず早いな」

赤髪の修は車を降りると、美智留の元に駆け寄った。

「美智留さん！」

美智留は修に気付き、振り返った。

「おう、おせえぞ！ あいつはもう一人で三匹は仕留めたぞ！」

美智留は怒鳴りつけた。

「すみません！ すぐ戦闘に参加します！」

修はフレームに手を掛けた。端までフレームを引っ張る。

「変身！」

紅に変身してすぐに、美智留に襲い掛かろうとしていた猫型ブレインを殴り飛ばした。

「あ、修さん！」

前方で戦っていた緑く RYOKUく が紅の隣に並ぶ。

「敵はあと七体です」

緑が紅に言くと、紅はうなずいた。

「よし。武^{たけし}、下がっていいぞ」

美智留がそう言くと、緑は後ろに下がり変身をといた。

「圭太！ どうした新入り！ さっさとこい！」

後ろのほうでもたついている圭太に怒鳴る美智留。圭太は走りつつフレームを端まで引っ張る。

「変身！」

圭太が白い光に包まれた。そして中から白くHAKUが出てきた。

「すみません！」

白は紅の隣に並んだ。

「謝るのは終わらせてからにしよう。じゃないと美智留さんがうるさいから」

紅が白に言った。白はうなずくとブレインに向かって走りだした。

「……美智留さん、昔はあんなじゃなかったのにな」

紅は美智留に聞こえないようにつぶやくと、走っていった。

「頼んだぞ、後輩達」

美智留は腕を組みながらつぶやいた。

ライダー達の戦いは、終わらない。

第十話、果てしなき戦い（終）（後書き）

本つつつ当に申し訳ありません！ 僕自身の都合（それはまあ、色々）により、蒼を終了させて頂いたいただきます！ 今まで読んでいただき、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8030a/>

仮面ライダー蒼～SOU～

2010年10月8日15時51分発行